

芭蕉文學の奥底にあるもの

— 奥の細道を中心に —

岩 見 護

一

『奥の細道』が初めて刊行せられたのは、芭蕉死後八年を経た元禄十五年である。これは芭蕉から去來に傳へた元本を影寫して刊行したのである。その元本は一時行方が知れなかつたのであるが、近年に至つて越前敦賀地方の西村家に傳來してゐることが知られ、故頼原博士によつて世に紹介せられた。それは、芭蕉が書家である素龍に清書せしめ、元禄七年最後の旅中に持ち歩いてゐた本である。頼原博士の紹介には「表紙は緑色の行成模様、綴絲は紫——但しこの綴絲だけは後に改めた形跡がある。中に紙の前後した所が一箇所あり、それは綴ぢかへた時に誤つたものと思はれる。——題簽は表紙の中央に貼つてあつて、白地に金の眞砂が散らしてあり、「お

くのほそ道」と記された文字は紛ふ方なき芭蕉の自筆である。」といつてある。

芭蕉は元禄二年の奥羽長途の旅ののち、江戸には歸らず、なほ二年あまりの月日を近畿各地に過し、元禄四年の冬に飄然として住むところもない江戸に歸つたのであるが、この間に旅の印象を整理して『おくのほそ道』の稿を成したのであらう。そして江戸で、親しい間柄で筆蹟堪能の人であつた素龍に、清書を依頼したのであらう。元禄七年の旅にこれを持ち參してゐたことについては、支考は「湖南の木曾寺に持ちおはして、東武のみやげにとみつから讀て外題は其時に自筆せられしが」としるし、去來は「年月頭陀のうちにかくして行先ノに隨身したまふ」としるしてをる。以上によつて注意したいのは、

一、筆蹟堪能の者を選んで清書させたこと。

二、これに高雅な装幀をしたこと。

三、旅行のさきざきに持ち歩いて門人達にも示したことに。

四、江戸のみやげだといつて自ら朗讀して聞かせたこともあること。

で、これによつて芭蕉がいかにこの書を愛重してゐたかがしられ、従つてまた、この書がいかに芭蕉にとつて會心の作であつたかが知られる。故に芭蕉を知り芭蕉の文學を知らうとするものは、何よりも『奥の細道』を知らねばならぬ。況や『奥の細道』の本質こそ、芭蕉文學の本質であると考へられるにおいては、なほ更のことである。いまそのことを明かにするについて、しばらく紀行文としてのこの書の成立過程を眺めよう。

二

芭蕉は長短五篇の紀行をのこしてゐるが、紀行文について「そも、道の記事といふものは、紀氏長明阿佛の尼の文をふるひ情を盡してより、餘はみな佛似かよひて其糟粕をあらたむることあたはず、まして淺智短才の筆に及ぶべくもあらず」と『笈の小文』に言つてゐる。こ

の言は、自ら筆とるに當つて會心の記述をなすことの困難なることを感じた實感でもあり、且つは見る人に對する卑謙の言辭でもあらうが、しかしまたこの言は、彼が夙に先人の遺した紀行文學に注意を拂つてゐたこと、紀行文學に新味を出したいと願つてゐたことを語るものでもある。

こゝにいふ紀氏とは紀貫之のことで『土佐日記』がある。長明とは鴨長明のことで、古くは『海道記』と『東關紀行』とはともに長明の作であると信ぜられてゐたから、芭蕉もそれをさしてゐるのである。阿佛の尼には『十六夜日記』がある。芭蕉は『土佐日記』『海道記』『東關紀行』『十六夜日記』を紀行文學の秀れたものとしてこゝにあげてゐるのである。一書としての獨立性を持つた古い紀行文學といふものは、略々これにつきるので、芭蕉はこれらの作品を尊敬し、それに追隨しつゝ新しい境地を拓くことを願うてゐたのである。

こゝに一つ問題になるのは、室町時代の紀行文を芭蕉はどう見てゐたかといふことである。たとへば「西行の和歌における宗祇の連歌における」といつて尊敬してゐる宗祇には『筑紫道の記』のやうな紀行があり、その弟子の宗長には『東路の津登』のやうな秀れた紀行があ

り、また同時代の一條兼良には『ふち河の記』のやうな有名なものも残つてゐるのである。とりわけ『東路の津登』は『奥の細道』に若干の影響を與へてゐると思はれるものである。然るに芭蕉はこれらのものを一つもこゝにあげないのは何故であらうか。惟ふに第一には文章を簡潔にするためであると考へられる。いろ／＼のことを列舉しては、繁縛になつて文章が死んでしまふのみならず、前後とのつり合もとれなくなるのである。第二には、室町時代のものはこゝにあげたものに比べると、古典としての權威が少いからであらう。第三には、室町時代の紀行文の多くは、敘述が平板で感じ方が型にはまり、且つ挿入の歌又は句ばかりが多くて、地の文章が頗る貧弱であるから、芭蕉はこれに満足することができなかつたのであらう。このことは單なる想像ではなく、芭蕉の紀行が室町時代の道の記を學びつゝ、ずつとそこから出ていつてゐることが、これを證明してゐるのである。

さうしてみると、芭蕉は平安・鎌倉時代の紀行文を讀んで、それはそれとして完成した美しさを持つてゐるので、それ以上には及びやうもないといふことを感じるとともに、俳人であつた芭蕉としては、そのネットリとし

た記述にあきたらず、自己の時代、自己の文學に即した、もつと足の軽い簡淨なものを欲したに相違ない。一方室町時代のものは、たしかに足が輕くて簡淨であるから、俳人たる芭蕉は一應はそれら連歌師たちの道の記を學んではみた。しかし單なる、句の前書のやうな文章や、平板なおきまりの物の見方には満足できぬ。もつと自分の魂に迫るものがほしい。それで、紀氏長明阿佛の尼の持つ切々たるものを生かしつゝ、兼良宗祇宗長の淡々たるものを學びたい、といふのが芭蕉紀行のねらひではなかつたであらうか。芭蕉の残した五つの紀行文の變化發展のあとを見ると、さう思はれるのである。

三

芭蕉はすでに俳人であるから、その俳諧的表現の上からは、直接に紀氏長明阿佛の尼の文を學ぶことはできぬ。それを學んで國學者の擬古文みたやうなものを作る程、彼の俳諧精神は低くはない。然ればその俳諧精神から言つても、文運推移の自然から言つても、比較的近い時代、近い文學の所産である室町時代の紀行に親近さがあるわけである。芭蕉初期の紀行はそこから出發してゐる。

こゝで五つの紀行を比較してみるのに、第一の『甲子紀行』は多くの句と前書との集成のやうなもので、紀行文らしい文章は少い。『廻國雜記』や『藤河の記』のおもかげがある。第二の『鹿島紀行』ははじめに長文があり、これが全體の序のやうになつてゐて、あとは同行者の句集で、文と句とは別々になつてゐる。第三の『笈の小文』では記述の量が多くなつて、挿まれた句の数が比較的少くなつてゐる。第四の『更科紀行』は前に文があつて後に句があつてゐることは『鹿島紀行』と略々同様であるが、句数はやゝ少くなつてゐる。然るに第五の『奥の細道』までくると、記述の文がずつと多くなり、挿まれた句の割合がずつと少くなつてゐる。もとより最初の『甲子紀行』も、決して單なる前書つきの句集といふべきものではなくて、俳諧的構成を持つた特色のある紀行ではあるが、なほ句の数が多すぎるため、紀行文としての趣が稀薄になることを免れぬのである。それが『笈の小文』でやゝ變じ、『奥の細道』に至つて大いに變じ、ここでは文と句と渾然とした調和を示すに至つたのである。このやうな變化は、芭蕉の紀行が、その形の上で、前代紀行の形態から出發して、次第に獨自のものを作り上げたことを語るものに外ならない。

更にその内容について見れば、最初から連歌者流の平板にあきたらず、紀氏阿佛の尼に學んで、そこに自己生涯の哀歡を深くうちこみ、海道記東關紀行の流にならつて、深く對象を凝視し味識し、更に唐宋の詩宗達の残した感懷をも借り來つて、紀行をたけ高からしめようとしてゐる。これらのことは一々の證文を引用するまでもなく明かなことである。かうした芭蕉の指向した方向において完成したものが『奥の細道』であるから、この書に會心の感を持ち、これを自らの旅路の友として持ち歩いたといふことも、うべなりといはねばならぬ。

四

『土佐日記』は、しはす二十一日といふ出發の日から、二月十六日といふ到着の日まで、一々日付を入れ、日を逐うて記載してある。いかにも日記の名に背かぬ日々の記録である。『十六夜日記』も『海道記』も『東關紀行』もみな日々の日付を有してゐる。また『藤河の記』は日々の日付を必ず入れ、『廻國雜記』や『筑紫道の記』や『東路の津登』は要所々々にだけ日付を入れてゐる。さればこれらはいづれも日記であつて、紀行としての獨立性をなほ十分には發揮してをらぬ。然るに芭蕉

は完全に日付を捨てた。これは紀行文の獨立した形態を創造したものとして注意すべきことである。既に日付を捨てた。それは事實を記録するといふことからの解放であり、一個の文學として、印象を鮮明に記述することと、さまざまの感慨を生き生きと記述することが主となつたのである。而してそれを統一するものは曆日ではなくして、主體たる旅人の心なのである。

室町時代の紀行に氣魄の缺けてゐるのは、作者達が常に行程の記録にこだはり、且つ途次の作品の記載にのみ力をいれすぎたため、作者自身のいのちがその中に躍動してゐないからである。芭蕉はそれにあきたりなかつた。芭蕉はそこに挿んだ句だけでなく、一行々々の文章の中に自己のいのちを注ぎ入れようとした。そしてそれに成功した。これ芭蕉の作品が紀行文として古今獨歩の力を持つてゐるわけである。さうした意味で『奥の細道』までの作品は、芭蕉紀行の成長過程を示すものであり、『奥の細道』は芭蕉紀行の完成形態として、一個渾然たる作品となり、どこを切つても作者の生命のにじみ出るものとなつてゐるのである。

すでに日付から獨立した以上、文學作品として、より完全なものとするためには、あるところでは事實の改訂

もまたやむを得ない。いふまでもなく全然事實を變更してしまつては、創作文學とはなるが紀行文學とはなり得ぬ。しかし徒らに事實に泥んで記述が混雜し文章がだれてしまへば「文學」は死ぬであらう。それを「紀行文學」たらしめるために最少限における事實の變更が行はれてゐるのが芭蕉の紀行である。特に『奥の細道』については、先年曾良の『隨行日記』が発見刊行せられて、「事實」だけの記載が見られるので、そのへんの機微を明かにすることができるといふ。

いまそれについて二つの例をあげる。一つは新潟から市振までの長い間何の記事も無いといふことについてである。その間には高田へも廻り五智國分寺にも詣でてゐるのである。高田の細川春庵邸では「藥欄にいづれの花をくさ枕」といふ句もできてゐる。それにもかゝらず芭蕉は「此の間九日、暑濕の勞に神を惱まし、病發りて事を記さず」と片づけてしまつてゐる。これは外形から見れば、思ひ切つた省略によつて文に變化を興へてゐることになる。しかしその省略法を越後といふ箇所で行つたといふことを支へてゐるのは、作者の内にひそむ氣持のわだかまりであつたと見ねばならぬ。

いま一つの例は小松大聖寺の間のことである。細道で

は小松——那谷——山中——大聖寺といふ順序になつてゐる。然るに事實は小松からすぐに山中にゆき、數日滞在の後、那谷を経て再び小松へ歸り、小松から大聖寺へ直行するのである。かやうに實際は地理的順路を逆にして二度小松に行つたのを、細道では簡單に地理的順路になほして記述したのである。これは事實に即する混雜をいとうてのことと解せられる。志田博士は、芭蕉が事實を如何に變更したかを調査し、それを説明して「芭蕉の持つた實事の文學に對する意識は徹底を缺くものであつたと見るの外なく、かう見る事に於て始めて右の矛盾が解決される事になるであらう」といつてをられるが、徹底を缺くといふ批判は、實事の文學の一邊に偏した見方で、これらの事實は、芭蕉が實事の文學よりも心境の文學をより重んじた作家であつたと見るることによつて、説明せられるものであると思ふ。いま特にこの事に論及したのは、このやうにして、『奥の細道』は紀行文である以上は實事の文學には相違ないが、實はその事實に觸れて呼びおこされた感慨、精神といふものの上に立つた文學であり、従つて芭蕉の文學の生れ出る精神的機微の動いてゐるのを見なければならぬ、といふことをいはうとしたのである。

五

以上の考察によつて、芭蕉の紀行文は次第に成長を遂げたもので、『奥の細道』は内容からも形式からも、その頂點をなすものだといつてよいであらう。しかしながら、芭蕉の文學は紀行だけではなく、他の重要な部分たる發句及び俳諧の附句といふものがある。しかしこれらは客觀的なものであり、または他人の作に附けるものであるから、作者の精神を直接十分に打出したものだといひ難い。また短篇の散文も多く残つてゐるが、その主たる精神は殆ど紀行に含まれてゐる。故に芭蕉の文學は多方面に及んではゐるが、その眞骨頂をさぐるには紀行文によるのが適當であるといふことができる。

芭蕉の文學を貫通するものは一であつた。一とは造化にしたがひ造化にかへることである。それは幻住庵記にもくりかへしてある中心精神である。しからばその「造化にかへれ」とか「四時を友とす」とかいふことが實際にはどのやうにして行はれるのであるか。それを實際に示してゐるものが紀行である。なかんづく、「行脚の一徳存命の悦び」を痛感し「風雲の中に旅寝することあやしきまで妙なる心地」になり「江山水陸の風光數を盡し

て今象潟に方寸を責め」る程の『奥の細道』こそ最も切實な「風雅即生活」の體驗記であると見なければならぬ。

『奥の細道』は芭蕉が特に句を選び文を稽へて、句と文との渾融をはかり、自己の文學の綜合體とし、且つそこに自己の自然觀、人生觀を流露させてゐるものである。而して自ら特にこの書を重んじてゐることは前述の如くであつた。これが本稿において、他の紀行を參照しつゝ特に『奥の細道』を中心として芭蕉文學の奥底に存するものを考へようとした所以である。

六

芭蕉の紀行文は一種悲痛の感情にみち、人の心の奥底を動かす迫力を持つてゐるのであるが、それは何に基くものであらうか。惟ふにそれは、そこに自己の生命が懸けられてゐるからであらう。自己をうちこむ力が強ければ強いだけ、讀む者に迫る力も強いわけである。芭蕉は紀行文をかきつゝ、自己の自然觀、社會觀、歴史觀、文學觀、宗教觀の悉くをそこにこめてゐるのである。

『甲子紀行』の「千里に旅立て路糧を包す……」の書き出しは、作者の孤影凄然たる旅心の描寫であり、不盡川の一段は人間の如何ともすべからざる運命の諦觀であ

る。内宮參詣の段の自己觀照なども紀行を契機として存在への反省に迫る趣がある。

『笈の小文』の冒頭「百骸九竅」の一段は無能無藝の自己反省に徹することによつて、堂々たる藝術論を展開してゐるものであり、「そも／＼道の日記といふものは」の一段は紀行文學論であり、「晩はやぶれて西行にひとしく」の一段は旅と人生とを論じて深奥の妙處に達したものである。されば三年前の『甲子吟行』に比べて、この紀行には一段と深く作者の主觀が盛り込まれてゐる。

『奥の細道』になると、その主觀が一段と強くなりつつ、客觀世界と一層深く融合する様な域に達してゐるのである。「月日は百代の過客にして」の一段は強く人生觀のあらはれた場所であり、白河、松島、平泉、象潟の段などは自然觀、歴史觀などが、多彩な面をもつてあらはれてゐる場所である。

しかしながら、芭蕉の紀行文が我々に迫るのは、單に力強いといふことではない。その力には一つの色あひがある。それは表面的な迫力ではなくて、内奥的な力である。人をして天地の間における自己の姿を顧みさせ、或は讀者をして心の奥處において同感せしめるやうな力で

ある。それは惻々として迫る悲涼の感、切々として訴へる寂寞の感である。

「千里に旅立て路糧を包ず三更月下無何に入といひけんむかしの人の杖にすがりて貞享甲子秋八月江上の破屋を立ち出るほど風の聲そゝろ寒けなり」といふ書き出しには、孤獨感、寂寥感が強く出てゐる。これは『笈の小文』の冒頭、『奥の細道』の冒頭をも支配してゐる感情である。『甲子紀行』ではこの感じが、すぐ次につゞいてゐる「野ざらしをこゝろに風のしむ身かな」の句によつて裏づけられてゐる。『甲子紀行』は各段をそれ／＼の句の前書のやうな風にしてゐるのだから、こゝも「風の聲そゝろ寒けなり」の文は冒頭でありつゝ、一方では野ざらしの句の前書なのである。さうすれば風の聲の寒さは、死を期してゐる者の心の寒さなのである。即ち冒頭文の持つ孤獨寂寞は、死につらなる孤獨寂寞なのである。道途に死ぬことを覺悟して旅してゐる、その覺悟が悲涼の諦觀となつて出てゐるのである。『甲子紀行』では、十月故郷に歸つて母の白髪を拜むところも、力のこもつたところであるが、兄が「只命有てとのみいひてことの葉もなきに」の一句が心にひびく。これは無常の世に危き命をたもつてゐることが、卒直にのべられてゐる

からである。前後に言葉がなくて、たゞ一つぽつりと發せられた一語であるから、強い力を持つのである。こゝも死を傍においてゐるところから感じられる生命の緊張である。

『笈の小文』には三つの重心がある。第一の重心は冒頭の風雅論で「百骸九竅の中に物あり、かりに名付て風羅坊と云、誠にうすものの風に破れやすからんことを云にやあらん」にはじまつてゐる。こゝにはいのちの危さ破れ易さが惻々として感じられてゐるのである。第二の重心は「跪はやぶれて」のところである。こゝでは「泊るべき道にかぎりなく立べき朝に時なし、只一日の願ひにのみ、こよひよき宿からん、草鞋の我足によろしきをもとめん」といふ。無論それは應無所住而生其心のこゝろではあるが、その根源は無常といふことの體感である。明日をあてにしてはならぬ。危き命の今に心を盡して生くべきであるといふことである。第三の重心は最後の須磨の秋を敘するところである。こゝに置かれた句

須磨の海士の矢先に啼やほととぎす
蛸壺やはかなき夢を夏の月

の二句には危き命の前にいろ／＼のことが展開せられてゐる。といふことが感じとして持たれてゐる。死ぬのが

命であり、いつまでもはかることのできぬ危いものが命である。その命の前に展開せられてゐるのが我が生ではないか。——かうした感受の仕方を作者はしてゐるのである。

『奥の細道』は「月日は百代の過客にして」にはじまり「古人も多く旅に死」んだことをいひ、それにつゞけて「予も何れの年よりか片雲の風に誘はれ」といふのである。さればこゝで作者は旅に死んだ古人のあとを踏まうとしてゐるのである。事實彼の夢寐にも忘れぬ西行は河内に死し、宗祇は箱根の湯元に死し、雪舟は人麿の客死したと同じ石見の國に死んでゐる。「若し生きて歸らばと定なき頼の末をかけ」といふのは、生還を期し難いといふことを十分心において出かけてゆくといふことである。この心は飯塚の苦しい一夜の段にことによくあらはれてゐる。「遙なる行末をかくへて斯る病覺束なしといへど、驛旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと、氣力聊取り直し道縦横に踏んで伊達の大木戸を越す」といふ。こゝに野晒を心にしたものゝ不思議な氣力が描かれてゐる。

芭蕉は死に對して親しい感じを持ち、死を憶ふことによつていのちの値を高く受取つた人である。そのおもひ

が鑛脈の如く彼の紀行を貫き、ところどころに頭を出してゐるのである。それが彼の紀行に獨特の風格と力とを帶びさせる祕密である。

七

このことはしかし紀行文の上ばかりではない。

雲とへだつ友かや雁の生わかれ
命なり僅かの笠の下涼み
命二つの中に生けたる櫻かな
かけはしや命をからむつたかつら
病む雁の夜寒に落る旅寢哉
數ならぬ身となおもひそ玉祭り
此秋は何で年よる雲に鳥
秋ふかき隣は何をする人ぞ
等多くの句の上にもこの鑛脈が露頭してゐる。それは作者の生涯を貫通してゐる生の體感であつたからである。それ故に

君火たけよきもの見せん雪まろげ

吉野にて櫻見せうぞ檜木笠

旅人と我が名よばれん初時雨

などの如き、極めたる風狂の句を解する場合において

も、死を道づれにする生命の悲涼をうしろに感ぜずしては、それを正しく解したとはいへぬであらう。

「雲とへだつ友かや雁の生わかれ」といつて出發した青年の日から、「夢は枯野をかけ廻」つた五十一年生涯の終りの日までを貫通してをるものは、實に死を内感し死とともに我が道をゆく心であつた。芭蕉文學の本質は、死を我が生の内容として、鋭く自覺的に抱いたところにあつた。

八

死を凝視し、無常感を文學の契機とするといふことは、我が中世文學の持つ特色である。然らば前述の如き本質を有する芭蕉の文學は、正しく中世の傳統をつぐものといはねばならぬ。この意味において、元祿の文學者

のうちで西鶴を近代的な文學者だといひ得るならば、芭蕉は中世的な文學者だといひ得るであらう。しかし無常を縁として生の否定に傾くのを中世的とするなら、芭蕉の如き、生の内容として死を内感するやうな受取り方、つまり現實否定的でない死の受取り方は、必ずしも中世的とは云へぬ。我々はそこに芭蕉独自の文學精神を見出すことができるのである。死は人間にとつて永遠の課題であり魅力である。それ故死を内に鋭く包含してゐる芭蕉の文學も、また時代を超えて、永久の生命を有してゐるといふことができるであらう。

(昭和二十六年四月二十八日)

註一 額原退藏「奥の細道の原本」(芭蕉研究第三輯)

二 各務支考「俳諧古今抄」

三 去來自筆本奥の細道(岩波影印本)

四 志田義秀「芭蕉と制作意識」(芭蕉研究第一輯)